

古川柳文芸句研究 — その一 —

大 野 雍 熙

A Study of the Kosenryu Bungeiku — Part 1 —

Yasuhiro Ohno

- 一 文芸句定立の必要性
- 二 古事記・日本書紀・風土記の説話と歌謡と古川柳文芸句
- 三 万葉集と古川柳文芸句

一

先づ伊勢物語第六段の本文を示そう。

むかし、おとこありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経て
よばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに來けり。
芥川といふ河を率ていきければ、草の上にをきたりける露を、「か
れは何ぞ」となんおとこに問ひける。ゆくさき多く夜もふけにけ
れば、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいた
う降りければ、あばらなる藏に、女をば奥にをし入れて、おとこ、
弓籙を負ひて戸口に居り。はや夜も明けなと思ひつゝ、ゐたりけ

るに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴
るさはぎにえ聞かざりけり。やう／＼夜も明けゆくに、見れば率
て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを
これは、二条の後のいとこの女御の御もとに、任うまつるやう
にてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗み
て負ひていでたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎國經の大納言、
まだ下らうにて内へまいり給ふに、いみじう泣く人あるをきゝつ
けて、とゞめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とはいふな
りけり。まだいと若うて、後のたゞにおはしける時とや。（傍線
筆者）（古典大系本）

右に関する句として、誹風柳多留の中における初出句は、

やわ／＼とおもみのかゝる芥川

の句である。川柳評万句合では、寶曆十二年義2に見えている。

右の句に関して、山路閑古氏は「古川柳」（岩波新書）の中で、次のように述べられている。

この句は「古川柳」の詠史句の中でも、傑作の一つといわれるが、むしろ文学趣味の句といった方がよいかもしれぬ。……

二条の后がまだ入内以前に、業平が連れ出して、芥川まで逃げたが、追手のために女を奪回されたという。句は直衣姿の業平が、桂姿の女を背負って逃げるところを描写し、「やわ／＼と重みのかゝる」という巧みな叙述をなしている。

この句は「伊勢物語」を読んだことのある、文学趣味の人にだけ伝えることを目的とし、「芥川」とあれば、その場面のすべてが理解されるほどの知識がなければ、句の面白味も判らない。したがって大衆向きでないという欠点もある。

「古川柳」は、浅くも深くも解し得られ、誰が見ても面白くという句が名句とされるが、その点この句には難がある。（二六六）

右の論述について、第一には、この句は「詠史句」という位置付けでよいのであろうか、という問題がある。古川柳研究史を見ると、詠史句という分類項目が立てられている。例えば、最新刊の三好信義氏著「古川柳研究」においても、従来の分類態度が継承されて、「詠史句」の項が立てられている。しかし、以下にも觸れる予定であるが、詠史句の名のもとに一括して処理されて来た、例えば、古

事記・日本書紀・風土記などの説話や歌謡、伊勢物語を初めとする物語類に拠る句、多くの和歌に拠る句、小倉百人一首に拠る句などを、詠史句の標題のもとで処理することには無理がある。そこで、これらの句については、「文芸句」なる分類項目を新たに立てて処理した方が、古川柳研究のための分類上からは、より妥当であると考える。

國歌八論の著者である田安宗武が出句していたことは、既に知られている。古川柳の句の中には、いわゆる国語学・国文学に関する句が多く見られる。これらの句は、国語国文学についての知識・造詣をもつ人によって詠まれたものであろう。また、これらの句を収録したということは、撰句者―例えば初代川柳もその一人である―に対して共感を与えたからにほかならない。これらの点をも考慮に入れるならば、単に従来からの慣習に倣って「詠史句」として処理するよりは、「文芸句」として処理する方が適切だと考える。

先に引用した文章中に、

伊勢物語を読んだことのある、文学趣味の人にだけ伝えることを目的とし

とあったが、実際に伊勢物語に拠る古川柳を検討してみると、一般庶民の家にも伊勢物語が所持されていたと考えなければ理解出来ない句が存している。

伊勢物語へ艾をのせて干

川傍柳一21

この句の作者風弓は、多くの文芸句を詠んだ人物である。

毛せて伊世物語よんで居る

一四二九

いせものがたりに太神宮なし

二〇二二

この句は、伊勢からの連想で皇太神宮を詠んだのであるが、伊勢物語の内容を正しく理解していたものと考えられる。この反対の意の句に、

いせものかたりもつたいたいと親父

二一〇八

この句も前句と同じく、伊勢からの連想で、皇太神宮を考え、「もつたいたい」と言ったのを揶揄しているところから考えると、やはり、伊勢物語の内容を理解しての句と考えられる。

先に、国語国文学に関する句が多く見られることを述べた。この関係の句を次に示しておきたい。まず「節用集」関係の句に次の如き句が見られる。

節用をひかへて庄屋した、める

八三

願い書を節用て書く村の公事

一一四三三

いかめしく節用を操る名付親

一五一二六

節用ハ見へず返事にせつかれる

一六三二六

右の句は、一般に節用集が広く利用されていたことを物語っている。「庄屋」が作成する文書や、「村の公事」の願書を書くにも、子供の名前を付けるのにも利用されていた。

節用が腰押をする文字の論

一三八三五

文字論争の根拠として節用集が利用されていた。これらの節用集

は、何本であったかは知ることは出来ないが、

史記にハ紅屋節用に饅頭屋

一〇二二三

の句は、いわゆる「饅頭屋本節用集」の存在が知れる句である。この外にも、節用集関係の句が見られるが、今は割愛する。

国語国文学関係の句は、このほかにも、

校合に數本をてらす名月記

八四三〇

の句が見えている。「校合」という語が用いられており、「校合」の意味内容は、「數本をてらす」即ち照らし合わせることというのを詠んだものである。「てらす」と「名月」は懸詞である。

八雲たつ道にくまなき明月記

八八一九

「八雲たつ」は、後述する和歌からの転意として、和歌を意味する。「くまなき」と「明月」は前句と同様懸詞である。

毎日記ともいふべき名月記

九七二四

日並の記、即ち日記ともいふべきものと詠んでいるところからみると、名月記の内容を知っていたと考えられる。即ち、右の三句は、いずれも名月記を実際に読んだ人の作であると考えてよいであろう。

磨光韻鏡肥後ずいきかとたわけ

一一一四二

下女が文新撰字鏡にも見へず

一六二二八

「磨光韻鏡」や「新撰字鏡」が詠まれているが、この作者も亦、同書を理解しているの句と考えられる。このほかにも、

訓蒙圖彙の真中に御入滅

九三三四

仏語なら呉音で讀メと鐘の銘

一〇四三

大野・古川柳文芸句研究

漢音で讀む日本の妙智力

一〇二10

「漢音」と「呉音」の区別が詠まれた句も見え、訓点では、

長谷点シてよんたを他人知らぬなり

二一6

の句が見えている。このほかにも、

枕をわって注をした春曙抄

九〇8

一寸した事を綴りし著聞集

九〇15

矢大臣公卿補任にのせぬ官

九二24

解しかねる所か蝕の湖月抄

一〇二3

高安の直段源氏の河内本

一〇一23

群書類従口で書キ耳で讀

一一三22

旧事記の療治膏藥を裏へ張

一〇八1

日本紀を家譜に引イてる大神樂

九四9

風土記を讀ンで天地の恩を知り

一五〇10

井蛙抄讀てる姫の世間見ず

一一八21

ぞく拾遺ならよめやうと無雅なやつ

九七33

夕鳥の駒も元輔集にのり

九一15

鯉ぶしハ土佐日記にも書キのこし

一〇〇123

さて、前述の伊勢物語第六段に関する句に戻りたいと思う。

見かけより二条の後氣がふとし

川傍柳二10

女をおぶった公家くくと聞く

川傍柳三30

ちつとおひろひ遊ハせと在伍言ヒ

川傍柳四31

地下は引っかつき公家衆ハおふひ出し

藐姑柳15

笏ハわたしに持タせなとおぶっさり

藐姑柳22

桂川より品シのいい芥川

やない筈一7

こしみの、うへからつめる中納言

二5

あくた川鍋取りめがとおっかける

五2

芥川草をわけてのせんぎ者

八25

あくた川とつちもにける形リでなし

九6

行あたりぱったりと出るあくた川

一六13

あくた川こしても先キにあてはなし

一八30

足よわをまめな男がつれてにげ

一九14

つれてにげなよと二じょうのきさきいひ

二〇4

出ハ出たが二条の後立チのま、

二四12

御后を芥の中でさがし出し

二四23

心中であらうと芥川で言イ

二五22

いしきをなでちやアいやよと芥川

三二32

戀の重荷をしよつて出る芥川

八〇23

アレサつめらせ給ひそと芥川

九一2

細腰を尾花のた、く芥川

九二24

ゑぼし着た川越を見る芥川

九二29

じよびたりくくと芥川

一〇一14

初代川柳の撰句集である「川傍柳」「藐姑柳」「やない筈」や、

初代川柳の撰句による俳風柳多留二四篇までの収載句も見え、また、

後期古川柳作者で文芸句を多く詠んでいる「集馬」「逆茂」「風松」などの句も見えている。

俳風柳多留拾遺にも、以下の句が見える。

折ふしは笏ておいとをちよいとやり	拾二9
まづ笏ハおぶうしやまだと腰へさし	拾四18
あくた川神代もきかぬふらち也	拾四22

これだけ多くの句が詠まれているのであるから、

文学趣味の人にだけ伝えることを目的とし……大衆向きでない

という欠点もある

と断定してよいものであろうか。これが問題点の第二である。

以下、各項目について論述する予定であるが、それらの論述を通して、古川柳に文芸句なる分類項目を立てる必要があることを述べたいと考えている。

なお、前掲の句の中には、いわゆる破礼句が存する。この破礼句の存在については、別に述べたことがあるが、（北海道教育大学語学文学第十号・昭和四十七年三月発行・文学の享受に関する試論（一）——川柳と、百人一首と万葉集と——）破礼句の中には直接原典に拠って作句されたというよりは、先行句に拠ったと考えた方がよい句がある。

古川柳における文芸句の範囲を、次のように定めたいと考える。

- 一、記紀、風土記の説話、並びに歌謡に拠る句
- 二、万葉集に拠る句
- 三、古今和歌集仮名序に拠る句
- 四、古今和歌集ほか勅撰集等の和歌に拠る句
- 五、小倉百人一首に拠る句
- 六、俳諧に拠る句

二 1

古事記、日本書紀の説話に関する文芸句から述べてみよう。

まず、古事記では、

古き道稗田の阿禮に耕させ

一一〇5

古事記序文には、次のように記されている。

和銅四年九月十八日を以ちて、臣安萬侶に詔りして、稗田阿禮の誦む所の勅語の舊辭を撰録して献上せしむといへれば、謹みて詔旨の隨に、子細に採り撫ひぬ。
（古典大系本）

右の句は、明かにこの古事記序文に拠っていると考えられる。この句の作者「佃」は、多くの文芸句の作者である点をも考慮に入れると、右の推定は間違いないまい。

右の句のほかに、古事記に関する句としては、次の句が見られる。

神代の古事記も伊勢が筆頭

一〇一31

大野・古川柳文芸句研究

文車へ乗て古事記が奥通り

一一一 41

ついでに、古事記伝に関する句をも挙げてみよう。

伊勢もの、著述にハハ、古事記傳

九六 25

古事記伝の著者本居宣長は、伊勢国松阪の人であり、また、伊勢国の人は儉約なことで有名で、物事に細かい、いわゆる始末屋であるところから、伊勢出身の宣長にとって、細かい注釈の古事記伝が向いているというのである。このことは、次の句によっても知られる。

注ウも極クこまかに伊勢の古事記傳

一〇〇 137

板ンまでもこまかに伊勢の古事記傳

一二三 62

ぼろを着た孝子も見へる古事記傳

一三八 4

二 2

二人にて蒼海原へ竿を入れ
諾と冊和して四海を産給ふ

拾四 1
八五 30

「古事記」には、

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に「是の多陀用弊流國を修り理り固め成せ」と詔りし、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其沼矛を指し下ろして晝きたまへば、鹽許々哀々呂邇晝き鳴して引き上げたまふに、其矛の末より垂り落つる鹽、累なり積もりて島と成りき。

(古典大系本)

「日本書紀」には、

伊弉諾尊、伊弉冉尊、天浮橋の上に立たして、共に計ひて曰はく、「底下に豈國無けむや」とのたまひて、廻ち天之瓊矛を以て、指し下して探る。是に滄溟を獲き。其の矛の鋒より滴瀝る潮、凝りて一の嶋に成れり。

(古典大系本)

右の二句は、引用した記紀いずれの本文に拠ったかは分明でない。しかし二句目の用字「諾」「冊」から推定すると紀に拠ったものかとも考えられる。いずれにしても、右の本文に拠った句と考えられる。

二 3

亀及び浦しま日本紀へも乗り

一一一 40

まつしろになつて浦島くやしがり

八九 6

いわゆる浦島子（丹後風土記逸文では島子）に関する句である。日本書紀雄略天皇二十二年の条に、

秋七月に、丹波國の餘社郡の管川の人瑞江浦嶋子、舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。便に女に化爲る。是に浦嶋子、感りて婦にす。相逐ひて海に入る。蓬萊山に到りて、仙衆を歷り觀る。

(古典大系本)

最初の句は、日本書紀に拠ったことは明かである。浦島子の説話は、「丹後風土記」と「丹後風土記逸文」にも述べられている。直接の記事が見える「丹後風土記逸文」を左に引用し

ておこう。

浦嶋子爲人、姿容秀美しく、風流なること類なかりき。斯は謂はゆる水の江の浦嶋の子といふ者なり。

(古典大系本)

また、万葉集卷九の一七四〇の題詞に、「水江の浦嶋子を詠む一首 并せて短歌」とある。

第二句目の句は、日本書紀には、この関係の記事は見えない。丹後風土記逸文には、

ここに、嶋子、前の日の期を忘れ、忽ちに玉匣を開きければ、既に膽ざる間に、芳蘭しき體、風雲に率ひて蒼天に翩飛けりき。

嶋子、既に期要に乖違ひて、還、復び會ひ難きことを知り、首を廻らして跼蹐み、涙に咽びて徘徊りき。

(古典大系本)

右の説話を原型として詠まれたのが、万葉集歌であるが、一七四〇の長歌の一節に、

……玉くしげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に
たなびきぬれば 立ち走り 叫び袖振り 臥いまろび 足ずりし
つつ たちまちに 心消失せぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆ
なは 息さへ絶えて 後つひに 命死にける……

とある。風土記逸文か万葉集のいずれに拠った句であるかは断定出来ない。

二 4

鳥の傳受も日本紀に古今集

一〇〇122

この句の鳥は二種であり、紀の方は「鵲鵲」、古今集の方は「鶯」である。

日本書紀卷一「一書(第五)に曰はく」から見えていこう。

陰神先づ唱へて曰はく、「美哉、善少男を」とのたまふ。時に陰神の言先づるを以ての故に、不祥しとして、更に復改め巡る。

則ち陽神先づ唱へて曰はく、「美哉、善少女を」とのたまふ。遂に合交せむとす。而も其の術を知らず。時に鵲鵲有りて、飛び來りて其の首尾を搔す。二の神、見して學ひて、即ち交の道を得つ。

(古典大系本)

右の句は、この文章に拠って詠んだものである。

類句には次のようなものがある。

いざなみのみこと女房のはじめなり

五〇11

あ、成程といざなぎのみことのり

一四四13

せきれいは一度教へて呆れ果て

六八25

アレサ最ふ氣が鵲鵲と詔り

八四8

せきれいの曰はくさてく御器用な

一〇四30

右の句は、いずれも破礼句である。この点から、右の説話は、当時一般化していたものであろう。

次に古今集について述べよう。古今集というのは、古今和歌集仮名序の次の一節を指している。

花になくうくひす、みずになくはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。

(古典大系本)

二 5

次に歌謡関係の句についてみよう。

日本書紀卷第十三允恭天皇の条に、

八年春二月、藤原に幸でまして、密かに衣通の郎姫の消息を察たまひき。この夕、衣通の郎姫、天皇を戀ひまつりて獨り居りき。それ天皇の臨でまししを知らずして、歌よみして曰ひしく、

我が夫子が 來べき宵なり ささがねの蜘蛛の行ひ 今宵著しも
(古典大系本)

古今著聞集によれば、衣通郎姫は住吉の南社、及び和歌浦の玉津島明神として祭られたという。

衣通郎姫は、

弟姫、容姿絶妙れて比無し。其の艶しき色、衣より徹りて晃れり。是を以て、時人、號けて、衣通郎姫と曰す。(古典大系本)とあるところから、

くらやみへそとおり姫は穴をあけ

一〇一〇

和哥の神うっかり立と透通り

六四一七

などの句が詠まれている。

「ささがに」の和歌に関する句としては、

來べき宵也さくらから毛虫下り

一三一九

來べき霄櫻へ毛虫ぶらさかり

六〇二七

今宵行幸が御座るぞと蜘蛛ふらり

一〇八二一

などがある。「文口取」の句としての類句を次に挙げておこう。

我勢子が來べき宵なり駒ヶ原

一〇一八

我かせこが來べきハむかしの囲もの

三九六

かけ取りの來べき宵なりさゝがりの

一六二

來べからぬ宵けぢくがぶら下り

一〇一三

わがせこがくべき宵也質をおき

拾五三

歌謡の趣意に拠った句には、

心まち衣通ひめが元祖なり

拾五一〇

笹蟹の振舞膳をすへて待

二五二五

などが見える。

この類句に、

蜘蛛ハから哥八雲では大和うた

九〇八

「蜘蛛ハから哥」というのは、江談抄によれば、吉備真吉備が中国に使した時、難文を読ませられて困窮した時、神仏を念じたところ、蜘蛛がぶらさがって来て、文字の上を這って読み方を教えたという伝説があり、このことを意味している。この関係の類句も見られるが、後に別稿で述べる予定である。

「八雲では大和うた」というのは、先に引いた衣通郎姫の和歌を示す。

右の句の類句に、

詩や船をおもへば蜘蛛をしえ虫

一二〇二一

がある。

二 6

そもく夜這の初りハ三輪の神

九四二七

三輪の神ちよつかな事でためさるる

拾四八

いわゆる三輪山伝説を詠んだ句である。古事記には次の文章が見える。俊秘抄上にも収録されているので、古事記説話を源流として流布されており、そのうえに立つての句とも考えられる。

此の意富多泥古と謂ふ人を、神の子と知れる所以は、上に云へる活玉依毘賣、其の容姿端正しかりき。是に壯夫有りて、其の形姿威儀、時に比無きが、夜半の時に驚忽到來つ。……故、教の如くして旦時に見れば、針著けし麻は、戸の鉤穴より控き通りに出でて、唯遣れる麻は三勾のみなりき。爾に即ち鉤穴より出でし狀を知りて、糸の従に尋ね行けば、美和山に至りて神の社に留まりき。故、其の神の子とは知りぬ。
(古典大系本)

二 7

海にた、みを敷つめるい、ひより

二四二

右の句は、次の古事記本文に拠つての句と考えられる。即ち、日本武尊東征の折の弟橘姫の入水の条である。

其れより入り幸でまして、走水の海を渡りたまひし時、其の渡の神浪を興して、船を廻らして得進み渡りたまはざりき。爾に其の後、名は弟橘比賣白したまひしく、「妾御子に易りて海の中に

入らむ。御子は遣はさえし政を遂げて覆奏したまふべし」とまをして、海に入りたまはむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、絶疊八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に其の暴浪自ら伏きて、御船得進みき。爾に其後歌ひたまひしく、
さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 間ひし君はも
とうたひたまひき。
(古典大系本)

二 8

古事記下巻仁德天皇の条に、

是に天皇、高山に登りて、四方の國を見たまひて詔りたまひしく、「國の中に烟發たず。國皆貧窮し。故、今より三年に至るまで、悉に人民の課、役を除せ」とのりたまひき。……後に國の中を見たまへば、國に烟滴てり。故、人民富めりと爲はして、今はと課、役を科せたまひき。是を以ちて百姓榮えて、役使に苦しまざりき。故、其の御世を稱へて、聖帝の世と謂ふなり。

(古典大系本)

日本書紀卷第十一仁德天皇四年春二月の条に、

群臣に詔して曰はく、「朕、高臺に登りて、遠に望むに、烟氣、域の中に起たず。以爲ふに、百姓既に貧しくして、家に炊ぐ者無きか。

とあり、七年夏四月の条に、

大野・古川柳文芸句研究

天皇、臺の上に居しまして、遠に望みたまふに、烟氣多に起つ。是の日に、皇后に語りて曰く、「朕、既に富めり。更に愁無し」とのたまふ。皇后對へ諮したまはく、「何をか富めりと謂ふ」とまうしたまふ。天皇の曰はく「烟氣、國に満てり。百姓、自づからに富めるか」とのたまふ。
(古典大系本)

問題はこの和歌である。

たかき屋にのぼりてみれば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり
この和歌を仁徳天皇の御製として、多くの句が存している。右に引用した記紀の記事には、いずれもこの和歌についての記載はない。古典大系本の頭注の如く、延喜六年日本紀竟宴歌の藤原時平の高殿に上りて見れば天の下四方に煙りて今ぞ富みぬるの改作である。この改作歌である「たかき屋に」の歌は、例えば扶桑略記には、次の如く記されている。

四年丙子二月。天皇登樓四望。民烟閑寥。仍三月己酉日。詔曰、自今以後、至于三年。悉除諸國課役。息百姓苦。宮舍雖破。暫不修造。

七年己卯。風雨順時。百姓富寛。五穀豊饒。頌德既満。四月。天皇登樓亦見。詔曰。朕既富足。秋烟繁昌。天皇詠曰。高木屋仁登天見礼者煙立民乃烟戸者仁幾波比二計里。
(國史大系本)
また、俊秘抄・七卷本宝物集・十訓抄にも収載されて、広く一般に流布されたのであろう。

この和歌に想を得た類歌が、壬二集に見えている。

煙たつ民の庵もいかゞ見む雲居に残る高き屋もなし

古川柳の作者達は、「たかき屋に」の歌を、紛れもなく、仁徳天皇の御製として考え、句を詠んだものである。それ故、ここで敢て取扱うわけである。数が多いので、主なものを挙げておきたい。

壹年に式度高き家にのぼる也

二〇三三

低き家の煙りは高き御製也

四三七

高き家ハひくきを恵む御製也

四三二六

生薪の煙も御製の内に入り

四八二八

御仁徳字に叶ふ御製なり

八五二九

御仁徳塩焼賤がけむりまで

九四一

高き家て煙り太平御覧也

一一一三九

ひくき民高き御製の筆に乗り

一一九三三

たかき家の御製にもれた鳥部山

七七二一

高き家は御製鳥部野辞世也

八五二六

右の二句は、鳥部山に立つ火葬の煙を詠んだもので、煙からの連想である。

御製にハ無常の烟を詠のこし

一二八二〇

右の句も、先の二句と同想の句である。

君見ずや民のかまどは煤だらけ

一二二乙四七

引摺の煙り御製の外に立

九〇二三

のような句も見え、また、破礼句には、

民のかまとを見おろして四ツ手かけ 一四八

民のかまどをうるをした御ほうらつ 二四九

などの句が見える。

御製にももしかまとのひとりもの 拾二二

一人者は無精をきめこんで炊事もしない生活が詠まれており、江戸庶民の生活をよく言い表わしている。

二 9

次は風土記関係の句について述べる。

松浦姫涙はみんな砂利に成 拾五十一

右の句は、領巾振り山の伝説をもつ松浦佐用姫を詠んだ句である。

松浦佐用姫については、日本書紀卷第十八宣化天皇二年冬十月の条に、次の如き記事がある。

天皇、新羅の任那に寇ふを以て、大伴金村大連に詔して、其の子盤と狹手彦とを遣して、任那を助けしむ。 (古典大系本)

右の条には、松浦佐用姫の對手である狹手彦が登場するだけである。

肥前國風土記松浦郡の条には、

昔者、檜隈の廬入野の宮に御宇しめしし武少廣國押楯の天皇のみ世、大伴の狹手彦の連を遣りて、任那の國を鎮め、兼、百濟の國を救はしめたまひき。命を奉りて、到り來て、此の村に至り、

即ち、篠原の村の弟日姫子を媾ひて、婚を成しき。……

褶振の峯……大伴の狹手彦の連、發船して任那に渡りし時、弟日姫子、此に登りて、褶を用ちて振り招きき。 (古典大系本)

とあって、「弟日姫子」が登場している。

右の本文とほぼ同様の記事が肥前國風土記逸文にも述べられている。「帔揺岑」の記事がそれである。

「松浦佐用姫」の名を用いているのは、万葉集卷五の題詞と和歌の中である。万葉集の和歌を、二例挙げておこう。

松浦瀉 佐用姫の児が 領巾振りし 山の名のみや 聞きつつ

居らむ (八六八)

遠つ人 松浦佐用姫 夫戀に 領巾振りしより 負へる山の名 (八七二)

右に見た如く、肥前國風土記の説話にある「弟日姫子」が、万葉集に継承されて改変して、「松浦佐用姫」となり、流布するようになったものであろう。その例として、この説話は十訓抄や古今著聞集にも収録されている。古今著聞集第一八〇話に「松浦佐夜姫夫の渡唐に別を惜む事」として述べられている。風土記の説話では任那への出発であったものが、古今著聞集では唐と改変されている。ちなみに、古今著聞集には、先に挙げた八七一の歌が付されている。

二 10

次は記紀歌謡について述べる。

大野・古川柳文芸句研究

古事記の速須佐之男命が、出雲における宮作りの条に、

玆の大神、初めて須賀の宮を作りたまひし時、其地より雲立ち騰りき。爾に御歌作たまひき。其の歌は、

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を

(古典大系本)

とある。

日本書紀卷第一の素戔鳴尊の宮作りの条には、

然して後に、行きつつ婚せむ處を覓ぐ。遂に出雲の清地に到り

ます。……彼處に宮を建つ。或に云はく、時に武素戔鳴尊、歌し

て曰く、「や雲たつ 出雲八重垣 妻ごめに 八重垣作る その

八重垣ゑ」。

(古典大系本)

右に挙げた「八雲立つ」の歌謡の関係句は数が多いので、いくつ

かに分類して考えてみたい。それには、次に挙げる記事が関連して

いるので、まず関連する記事の中、いくつかを引用しておきたい。

1、古今和歌集仮名序の文

あらがねのつちにしては、すさのをのみことよりぞ、おこりける。ひとの世となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまり、ひともしはよみける。

(古典大系本)

2、俊秘抄

歌の始めなり

(歌学文庫本)

3、無名抄

(この歌 筆者注) より文字の數定ると云ふ。

(歌学文庫本)

4、古今著聞集卷五 一四二話

和歌起源の事並びに和歌は豫遊の媒たること (古典大系本)

前述の如く、右の記事を予め考慮に入れて分類し、それらの関係の句を挙げていきたい。

A、歌謡の趣意に拠る句

八重垣ハ三重に作って妻を入れ

三三 23

二十四重垣根へ妻をこめる也

四四 35

八重垣を折句のやうに讀給ひ

四七 1

右の三句は、「八重垣」の語が三度詠み込まれているのに着目したものである。

八重垣の後チ九重の大内裏

、八三 67

妻こめぬうちハ尊も御放埒

一二一乙 16

右の句は、例えば古事記によれば、「阿を離ち、その溝を埋め、亦其の大嘗を聞看す殿に屎麻里散らしき」(古典大系本)を始めとする数々の乱暴を行ったことを含意しての句であり、古事記や日本書紀の記事を知っていたと考えられる。

八重かきもつくらぬ内に女房を

一四 14

B、和歌の起源とする句

八雲たつ迄は氣ま、な和哥の道

五二 8

八雲から次第にはれる和哥の道

六〇 1

八雲たつ後にぎわひのけふり立

七二二九

右の句は「八雲立つ」の歌が和歌の起源をなし、その後前述した「高き屋に」の歌が詠まれたというのである。

俳優も和哥の手に葉も出雲から

一三三三二

右の句の「俳優」は「出雲のお國」が踊の創始者であり、和歌も「八雲立つ」を起源とするという句である。

八重垣はむすび新ばり綴ぞめ

一〇九二四

この句は、二二の項の連歌の起源と関連しての句である。

C、「八重垣」を和歌の意とする句

八重垣の種を尊む柿の本

五五二

右の句は、古今和歌集仮名序の、

かのおほん時に、おほきみつのくらゐ、かきのもとの人まろなむ、哥のひじりなりける。
(古典大系本)

とある柿本人麻呂が、和歌の道を尊んだというのである。

八重垣ハ手に葉に澁をぬいた哥

九二一

右の句は、前述の句の趣意と同じく、「柿」と「澁」の縁語によるものである。

八重垣の内江はいれぬ唐詩選

五九一三

八重垣を潜って哥の實を拾ひ

九八五〇

長歌のちらし八重の初幕也

一〇二七

D、文口取の句

其八重垣を結足して一ト構へ

六二一一

E、その他の句

八重垣は異國の人に破らせず

五四六

古今の名城八重垣に柵を結

九七一

出雲八重垣貳百茶と下女思ひ

一六二四

蜘蛛ハから哥八雲では大和うた

九〇八

右の句については、前述した。

二二

八重垣ハむすび新ばり綴ぞめ

一〇九二四

か、なへハ夜にハこ、のよ疱瘡膿

九七二五

古事記日本武尊東征の条に、

即ち其國より越えて、甲斐に出でまして、酒折宮に坐しし時、

歌曰ひたまひしく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

とうたひたまひき。爾に其御火焼の老人、御歌に續ぎて歌曰ひしく、

かがなべて 夜には九夜 日には十日を とうたひき

(古典大系本)

日本書紀卷第七景行天皇四十年の条に、

大野・古川柳文芸句研究

蝦夷既に平けて、日高見國より還りて、西南、常陸を歴て、甲斐國に至りて、酒折宮に居します。時に舉燭して進食す。是の夜、歌を以て侍者に問ひて曰はく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

諸の侍者、え答へ言さず。時に秉燭者有り。

王の歌の末に續けて、歌して曰さく、

日日並べて 夜には九夜 日には十日を

(古典大系本)

とある。

第一句目は、前項で述べた「八雲立つ」を和歌の起源とし、右の記紀歌謡を「筑波の道」即ち連歌の起源として考えた句である。

第二句目のものは、單なる文口取の句ではあるが、記紀の歌謡を知つての作と考えられる。

三

万葉集関係の古川柳文芸句については、本年六月頃刊行予定である大久保正氏編「万葉とその伝統(桜楓社刊)所収の拙稿「万葉集と古川柳文芸句」に既に述べたことがあるので、この文章となるべく重複しないように配慮して、一首についてのみ述べることにする。元来は万葉集歌であるが、直接万葉集に拠つて句作されたと考ええるよりは、むしろ古今和歌集仮名序の記事に拠つたと考えられる歌がある。世間に広く流布された源は仮名序の記事であろう。

安積香山 影さへ見ゆる 山の井の 浅き心を 我が思はなく

に (卷十六 三八〇七)

古今和歌集仮名序によれば、

なにはづのうたは、みかどのおほむはじめなり。(この和歌関係の句については、別稿で述べる予定である)

あさか山のことは、うねめのたはぶれよりよみて、このふたうたは、うたのち、は、のやうにてぞ、てならふ人の、はじめにもしける。(古典大系本)

とある。右の文章から、古川柳作者は、「なにはづ」の歌は和歌の父、「安積香山」の歌は和歌の母と判断した。

こと葉の母方となる浅香山 一一四 27

の句が、これに該当する。

右の二首の歌は、「てならふ人の、はじめにもしける」とあるところから、

難波津と山の井歌の關とせき 七七 1

浅香山麓から入和歌の道 六一 20

とも詠まれている。

「六會目題名所古跡諸國地名町名橋」の標題によって詠まれた句に、

敷島で其名ハ高キ浅香山 七二 4

が見えている。

以下、文芸句を列挙しておく。

采女が原に山の井の浅き戀 一四六 40

山の井は浅きこころの哥でなし

九八五九

敷島で其名ハ高き浅香山

七二四

夷賊にハ道のわからぬ浅香山

八四二〇

浅香山君が無雅なら馬の耳

一六四一三

なお、万葉集の左注と、その左注を承けた古今和歌集假名序では、采女が「浅香山」の歌を詠んで葛城王の怒を解いたとされている。

後世この説話は改変されて、最初に大和物語の説話となり、それが継承されて今昔物語・十訓抄・古今著聞集に収録されるようになった。その一例として、古今著聞集には、「或内舍人大納言の女を盗みて奥州浅香郡に逃ぐる事」とされ、本文の末尾に「……みずからはかなく成にけりと、やまとものがたりにしるせり」と見える。

古川柳文芸句では、改変された説話に拠ったと考えられる句は、発見出来なかった。

〈未完〉

注 1 本年六月刊行される大久保正氏編「万葉とその伝統」

所収の拙稿「万葉集と古川柳文芸句」と一部重複するところがある。

2 万葉集関係の文芸句については、右の拙稿を御参照いただければ幸いである。

本年三月末日を以て、保健体育科長 奈良岡健三先生、並びに、初等教育学科長 長瀬米蔵先生、初等教育学科教授 倉島繁先生には、御退官の由である。拙き一文を三先生に献呈いたし、三先生の

今後の御加餐をお祈り申し上げる次第である。

(一九八〇・三・七)